

しんろ

## 生産性の向上が持続的成長のカギ ～2020年の年頭所感～

日本銀行福島支店 支店長

中山 興 (なかやま こう)



年頭に当たり、新年のご挨拶を申し上げる前に、まずは、昨年台風19号等で被災された福島県の皆様にお見舞い申し上げます。その上で、被災された皆様をはじめ、福島県の皆様にとりまして本年が佳き一年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。

さて、昨年の福島県経済を振り返りますと、夏場頃まで緩やかな回復を辿っておりましたが、米中貿易摩擦や中国の景気減速に加え、世界的な情報関連財の生産調整が長引いたことから、秋口に製造業で減産の動きが強まりました。さらに、台風19号等による水害が企業や家計に被害をもたらし、県内の幅広い業種で企業活動に支障が生じました。一方、分配面は、完全失業率が比較可能な1997年以降最低水準にあるなど、引き締まった状況が続いており、支出面でも、個人消費や設備投資が堅調に推移しています。つまり、生産面が押し下げられている一方、分配面と支出面は堅調を維持しているという綱引きの結果、福島県経済全体では、回復に向けた動きが足踏み状態となっています。

もともと、世界的な情報関連財の出荷在庫バランスは底打ちの兆しをみせていますし、台風19号等によって被災した企業や家計も生産再開や生活再建に向けて懸命に取り組んでいます。また、被災し毀損したインフラの復旧も進められています。こうした取り組みはマクロの有効需要を押し上げますので、近いうちに福島県経済は緩やかな回復へと復していく見込みです。

それでは、緩やかな回復へと復した後、さらに持続的な成長軌道へと着実に乗せていくためには何が課題でしょうか。かつて経済学者のロバート・ソローが論じたように、経済成長には①人口成長、②資本の深化、③技術進歩の3つの要素があります。ところが、人口については、少子化と高齢化の進行、さらに福島県では原発事故後の人口流出も相俟って、成長のエンジンとしては期待薄です。また、資本の深化についても、資本装備率（機械設備等の導入状況）はすでに相当高いのが現状です。

結局、技術進歩つまり生産性の向上がわれわれに残されたほぼ唯一の成長のカギということになります。この点、福島県では、浜通りにおける福島ロボットテストフィールドやいわきバッテリーバレー構想といった福島イノベーション・コースト構想、中通りのふくしま医療機器開発支援センターや福島再生可能エネルギー研究所、会津のスマートシティなど、最新のデジタル技術とデータ活用で立脚したさまざまな取り組みが進められています。さらに重要なのは、こうした技術向上の恩恵は、当該産業の生産性向上にとどまらず、広く関連産業ひいては日常生活の生産性向上にも繋がっていく点にあります。

豊かな自然の恵みと技術力の高さ、福島県人持ち前の誠実さに裏打ちされた人的資源の豊かさ、これらをフルに活かして生産性の向上に繋げていくことが持続的成長のカギです。私ども日本銀行も、そうしたカギを胸に秘めた福島県の皆様の取り組みを金融面からしっかりとサポートして参ることをお誓いし、年頭のご挨拶とさせていただきます。